

中村憲吉全集

中村憲吉全集

第二卷

中村憲吉全集 第二卷 (全四卷)

一九三七年一〇月三〇日 第一刷発行
一九八二年一月二五日 第三刷発行

定価 七五〇〇円

著者 中村憲吉

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
101 株式会社 岩波書店

電話 〇三二三五四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・松本製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

萬葉集短歌輪講……………一

萬葉集卷二より……………三

萬葉集卷三より……………一四

萬葉集卷四より……………四九

萬葉集卷八より……………六六

萬葉集卷九より……………七四

萬葉集卷十より……………八一

萬葉集卷十一より……………八三

山部赤人……………八九

正岡子規……………二七

歌論歌話……………一五一

作歌態度雜感……………一五三

歌壇と萬葉調……………一五九

和歌の作り方……………一六四

アララギ二十五年……………一八四

アララギ前半期の思ひ出……………一九二

批評及び序跋……………二三三

富田碎花氏著『悲しき愛』……………二三五

前田夕暮氏著『陰影』合評より……………二三〇

若山牧水氏著『死か藝術か』漫評……………二三三

『桐の花』を讀みて……………二三七

『生くる日に』に就て……………二四三

歌集藤むすめ……………二四六

『切火』の歌合評より……………	二四九
『氷魚』と『あらたま』……………	二六一
左千夫歌集雜感……………	二七六
島木赤彦選集序……………	二八六
あらたまの著者に……………	二九六
歌集藤浪序……………	三〇一
太虚集の出る前に……………	三〇五
『庭苔』の特色……………	三〇九
『寒竹』を讀みて……………	三三三
田原廣治遺著芬陀利華序……………	三四二
茂吉君の歌道について……………	三四八
土屋文明君の歌……………	三五〇
大原壽恵子歌集跋……………	三五五
歌集鶉を讀む……………	三六五

短歌批評……………三七二

自作歌について（明治四十四年四月）……………三七三

堀内卓遺歌附記（明治四十四年五月）……………三七七

談話會記事（明治四十五年六月）……………三七八

アララギ前號歌評一（大正三年七月）……………三八〇

アララギ前號歌評二（大正三年八月）……………三八八

アララギ前號歌評三（大正三年九月）……………三九四

堀内卓造の歌（大正四年四月）……………三九九

選歌質疑應答（大正五年八月）……………四〇三

赤彦の歌を評す（大正五年十月）……………四〇七

歌評（大正七年八月）……………四一〇

アララギ二月號短歌合評より（大正九年三月）……………四一三

歌評一（大正十三年五月）……………四二二

歌評二（大正十三年十一月）……………四二六

アララギ四月號短歌合評より	(大正十四年五月)	四二九
アララギ五月號短歌合評より	(大正十四年六月)	四三三
春の愛誦歌	(大正十五年五月)	四三六
自作歌について	(昭和二年二月)	四三七
前月歌壇一人一首評	(昭和二年二月、四月、七月)	四三九
朝日歌壇選者として	(昭和五年四月)	四四一

故人追憶記

堀内君のこと	四四五
伊藤左千夫追憶斷片	四五七
長塚さんの思出	四七三
長塚節に就て	四八九
赤彦君を悲しむ	五〇六
千樫君を悼む	五三五
千樫君と僕	五四一

人としての赤彦君	五四五
加納曉追憶断片	五四六
百穂畫伯の事ども	五五二
旅信・消息	五五九
一 (明治四十四年十月)	五七一
二 (明治四十五年三月)	五七一
三 (明治四十五年四月)	五七二
四 卷頭言 (大正二年一月)	五七三
五 浅間の湯より (大正二年二月)	五七三
六 (大正二年八月)	五七五
七 新橋から宇治まで (大正二年八月)	五七六
八 備後より (大正二年九月)	五八〇
九 備後より (大正二年十月)	五八四
十 長塚節氏の私信の一部に就いて (大正三年六月)	五八四

十一	長塚節へ (大正三年八月)	五八九
十二	赤彦へ (大正三年八月)	五九〇
十三	編輯所便 (大正三年十二月)	五九二
十四	旅より (大正四年十月)	五九三
十五	備後より (大正四年十一月)	五九四
十六	旅途より (大正六年十二月)	五九六
十七	(大正七年三月)	五九九
十八	備後より (大正七年五月)	六〇〇
十九	(大正七年六月)	六〇一
二十	備後より (大正七年六月)	六〇二
二十一	(大正七年七月)	六〇四
二十二	備後より (大正七年十二月)	六〇四
二十三	(大正八年三月)	六〇五
二十四	備後より (大正八年五月)	六〇六
二十五	備後より (大正八年六月)	六〇六

二十六	備後より（大正九年一月）	六〇九
二十七	京都より（大正九年一月）	六〇四
二十八	（大正十二年十月）	六〇五
二十九	京都便り（大正十三年一月）	六〇六
三十	京都赤彦追弔法會記（大正十五年六月）	六〇六
三十一	比叡山通信（大正十四年六月）	六〇七
三十二	大阪より（大正十四年七月）	六〇九
創作・隨筆 ……………六二二		
	宵の手帖より……………六三三	
	京都のこと、其の女のこと……………六三六	
	震災追想四篇……………六五二	
	三次の鶉飼……………六五四	
	三瓶の秋色……………六六七	
	山禽三つ……………六六八	

賴杏坪先生 六九五

峽村小話 七〇四

卷末記 一

目次

九

萬葉集短歌輪講



萬葉集卷二より

○

皇后（磐之媛）の天皇を思ばして御作歌四首

君が行けなゆきがなくなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

皇后の半面には理義正しく嚴格なる思想が横はつて居た様に思ふ。八田皇女のことにしても之を納れることを拒まれたのは單なる嫉妬からでもない様である。天皇の同意を乞はれたに對する御答歌の「衣こそ二重もよき小夜床を並べむ君はかしこきろかも」に現れた情操の締つて居る所を見ても、又一方では、速總別王討伐の將山部大楯連が王の妃女鳥王の死骸の手に纏かれたる玉釧を取つてその妻に與へた事件に現れたる皇后のヒユマニチーに對する敏感なるを見ても、殊に八田皇女入内後、筒城の宮に籠られたる様子にしても、この感を深くする。それで居ながら他半面にはこの四首のやうな女性性の優しさの現れた哀音切なる歌を詠んで居られる。かう思ふと皇后の思想生活は天皇に對する熱情

を屢々悲しい矛盾に陥れたとも思へる。但背の天皇の多感多情はその尊い詩人的性質の一面の現れてあつた。

○
かくばかり戀ひつつあらずは高山の磐根し枕まくらきて死なましものを

僕にはこの歌は、「夜思想感情」が何處かにしのび入つて居る歌だと感じられたのである。それは一首全體が割合に誇張された感じを歌つたやうで居ながらしんみりとする所があり、同時にほろりとなり相な作者の感情も見える故である。で、この一首は夜に作られた歌のやうにも思はれ、吾々も夜燈の下に誦したならばその歌の思想感情をよく感得される様である。其處に白日の堅實な理知に受入れられぬ所と、又それには到底解し得られぬ所がある。「高山の磐根し枕まくらきて」などと言ふ句なども左様にして解すると作者の心根がわかると思ふ。實は僕はこの句に不審を抱いたから、作歌當時の心理について考へて見て斯様に解したのである。而して、これも漫然と「高山」と詠まれたのでなく、之を筒城の宮にこもられた後の作歌と見て、その宮居地の山城の黒い夜の山脈のことを思ひ浮べたい。夫れから「死なましものを」と言つたこの「ものを」に注意したい。

○

在りつつも君をば待たむうち靡くわが黒髪に霜のおくまでに

別に言ふことなし。ただ黒髪の枕詞に「ぬばたまの」と言ふを用ひず「うち靡く」と用ひてあるのは注目される。而して第四第五句は現代の僕等ならば如何なる表現を用ひるであらうかと思つた。

○
秋の田の穂の上に霧らふ朝がすみいづべの方に吾が戀ひやまむ

今は博文館の日本歌學全書本の萬葉集と、略解によりてこの歌を解する外の便宜もない故、詳しい考證は諸君に依頼して、僕だけの見解を記して置かう。

(一) 第四句の「何時邊」の訓み方には説があるやうであるが、略解には「いづべ」と訓ませ、古義には「いづへ」と訓ましてある相である。「いづへ」と訓むか「いづべ」とするかが一寸問題であるが、今は現代の僕等に親みのある「いづべ」と訓んで置きたいと思ふ。字意は「何れの方に」と言ふ意味。

(二) 「我戀將息」の戀は略解では名詞として解せられて居るが僕は動詞として解したい。何となれば、之を名詞と解するは動詞として解するよりも四句「いづべの方」と言ふ句に如何にもより多く方角を指示される様な響を與へられ、従て、一種の視覺的聯想を誘起し易く、而も戀は無形な精神的事實であるだけにこの聯想が不自然になり易いと感ずるが故である。乃ち又、動詞と解するが第四句に感情の響を切實に誘入彈響せしむる所以であると思ふのである。